

日本心理学会第74回大会ワークショップ
「宗教心理学的研究の展開(8)－死生の意味するもの：生と死を見つめる宗教心理学」

子どもは死んだらどうなると思っているのか？

大阪大学人間科学研究科 臨床死生学・老年行動学講座
博士後期課程 辻本 耐

はじめに

■ 「死んだらどうなるの？」

期待される答え…継続する生(天国) ↔ 生の断絶(終わり)

■ 測定するための尺度

Belief in afterlife scale (Osarchuk & Tatz, 1973)

来世観尺度(金児, 1995)

■ その他の尺度

➤ 死に対する態度を測定する尺度

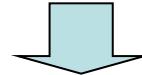
Death Attitude Profile-Revised (Wong et al., 1994)

➤ 死の不安を測定する尺度

Revised Death Anxiety Scale (Thorson & Powell, 1994)

➤ 宗教性(宗教観・スピリチュアル)を測定する尺度

宗教観尺度(金児, 1997)



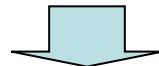
死の不安を軽減し、心理的健康を維持することが期待されている

問題

■ 子どもは死んだらどうなると思っているのか？

{ 天国・お空・お星様 = 信じてる
お墓・骨になる = 信じていない

- 死んだらどうなるのかという問に対する適切な答え(表現)を知っているだけ
- 日常生活において、死者の行方を表現するための名称として溢れている



表現の獲得 = 宗教性(宗教的なもの)の萌芽

■ 人間だけでなく動物の死後についてはどう捉えているのか？ 子どもにとってはペットなどを通して体験されやすい(埋葬行動など)

方法 ①

■ 目的

幼児期にある子どもを対象に、彼らがどういった死後観を有しているのか、いつ頃から死後についての問に対して適切な応答が可能なのか、また人間と動物の死後観を弁別しているのかについて検討すること

■ 時期 ; 2008年10~12月

■ 対象 ; 調査対象117名 – 分析対象110名

■ 年少児(3歳児クラス) 35名

男児13名、女児22名、平均月齢49.6ヶ月、範囲3歳7ヶ月～4歳6ヶ月

■ 年中児(4歳児クラス) 35名

男児16名、女児19名、平均月齢60.3ヶ月、範囲4歳7ヶ月～5歳6ヶ月

■ 年長児(5歳児クラス) 40名

男児13名、女児27名、平均月齢74.1ヶ月、範囲5歳8ヶ月～6歳6ヶ月

方法 ②

■ 調査方法

人間と動物の死後に関する質問について、個別面接を2回実施

■ 調査内容

「人は死んだらどうなると思いますか？」

「動物は死んだらどうなると思いますか？」

質問内容が理解できない、内容が判別できない、反応がない、「分からない」と答える子どもについては、「人(動物)は死んだらどこへいくのかな?」と促した

■ カテゴリー化

2回の調査から得られた反応をカテゴリー化

基本的に2つ以上反応がある場合は、最初の反応を採用

結果 ①

Table 1 人間と動物の死後観のカテゴリー集計

大力カテゴリー	小カテゴリー	Human	Animal
来世に関するもの Human:37 (34%) Animal:38 (35%)	天国	27 (25%)	30 (27%)
	空・星	8 (7%)	3 (3%)
	その他来世	2 (2%)	5 (5%)
死を現実的に捉えているもの Human:28 (25%) Animal:35 (32%)	墓	6 (6%)	11 (10%)
	骨	4 (4%)	1 (1%)
	死の状態 (1)	13 (12%)	14 (13%)
	死の状態 (2)	3 (3%)	9 (8%)
	消滅	2 (2%)	0 (0%)
生と死が未分化なもの Human:26 (24%) Animal:17 (15%)	医療	18 (16%)	11 (10%)
	人間の行動 / 不明	8 (7%)	6 (6%)
	主体の逆転	6 (6%)	1 (1%)
	回答なし	13 (12%)	19 (17%)

N = 110

結果 ②

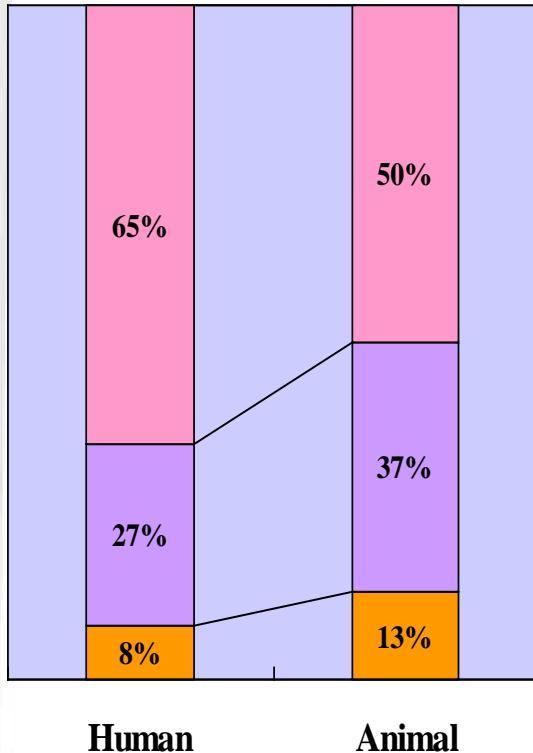


Figure 1 来世に関するもの

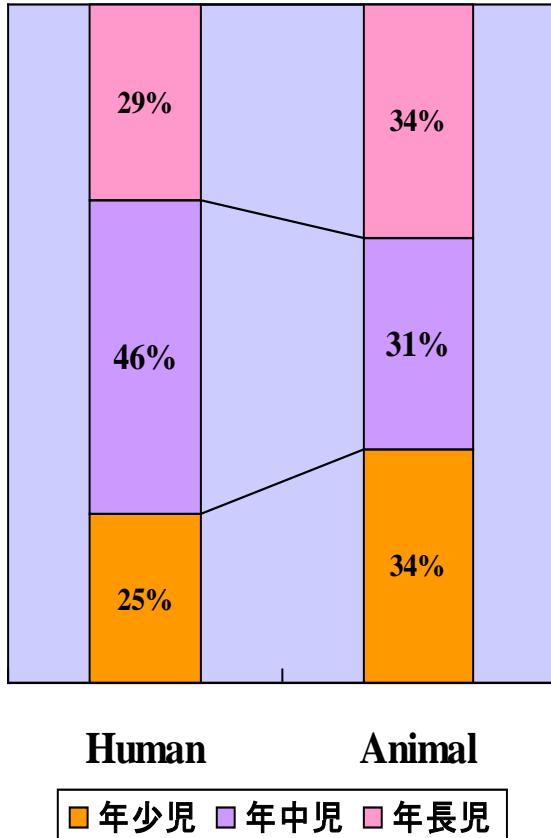


Figure 2 死を現実的に捉えているもの

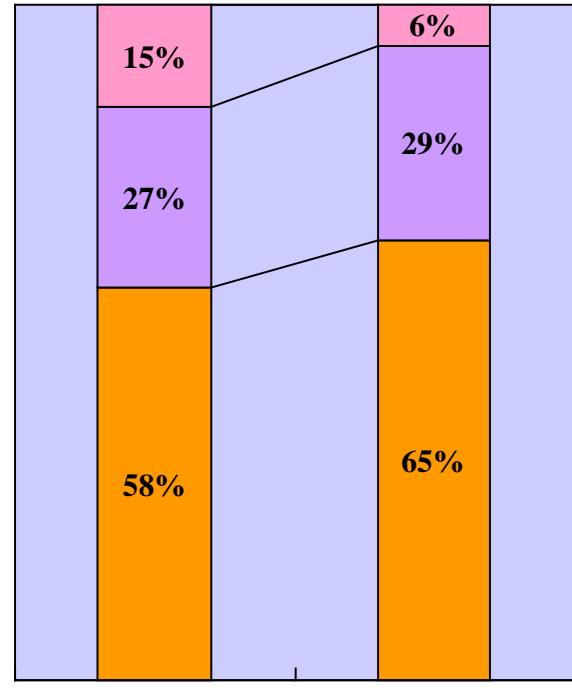


Figure 3 生と死が未分化なもの

結果 ③

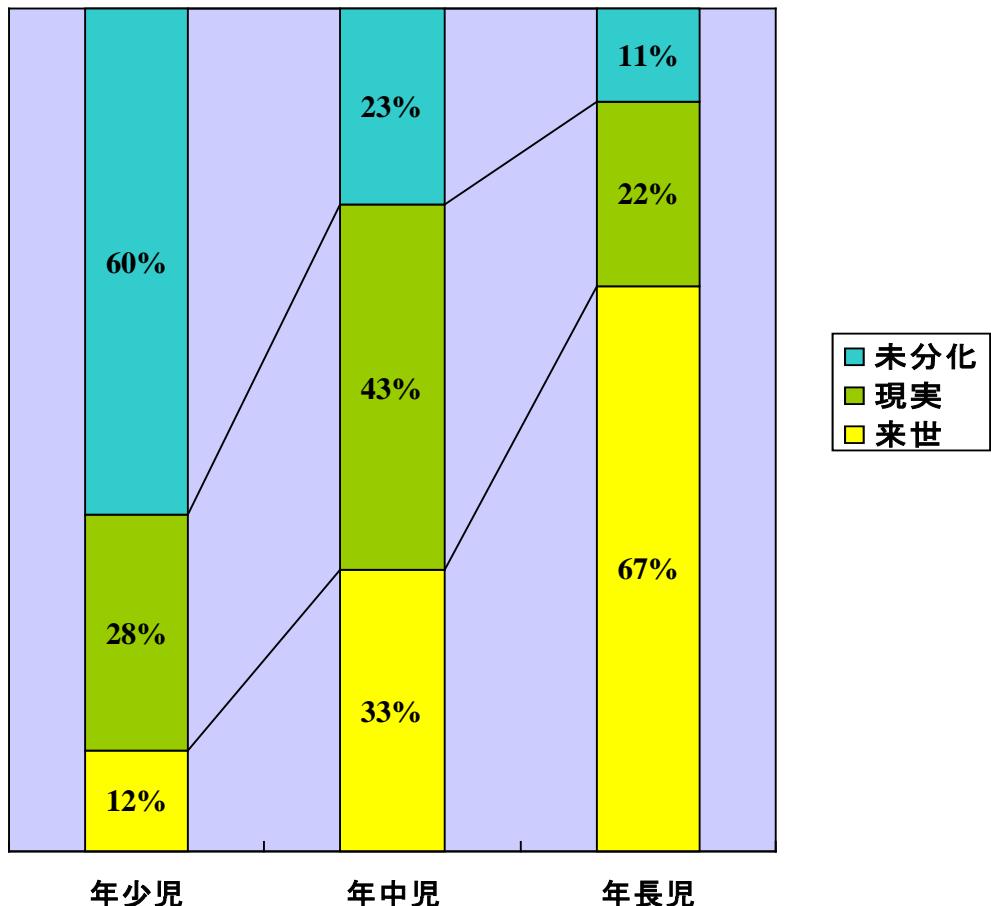


Figure 4 学年 × カテゴリー (Human)

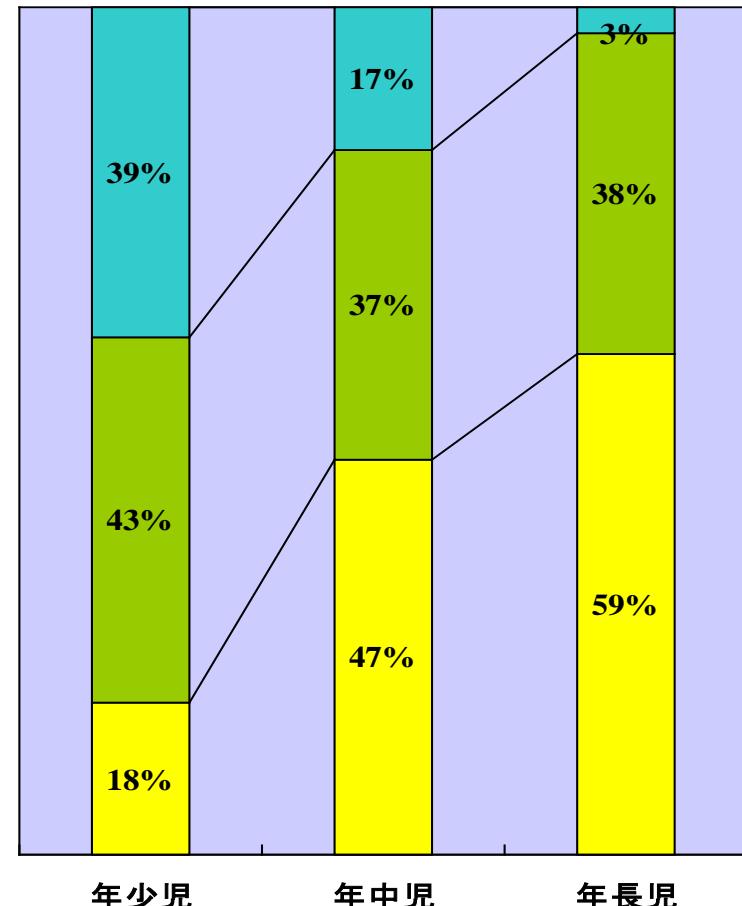


Figure 5 学年 × カテゴリー (Animal)

結果 ④

Table 2 Human × Animal

Human	Animal	来世 (n = 35)	現実 (n = 30)	未分化 (n = 12)
来世 (n = 33)		24 (73%) (69%)	9 (27%) (30%)	0 (0%) (0%)
現実 (n = 20)		6 (30%) (17%)	13 (65%) (43%)	1 (5%) (8%)
未分化 (n = 24)		5 (21%) (14%)	8 (33%) (27%)	11 (46%) (92%)

N = 77 注) セル内数字は人数, セル内 () 上段 : 人間%, 下段 : 動物%

まとめ ①

- 「回答なし」を除き、11の小カテゴリー、3つの大カテゴリーに分類
- 来世に関するもの：年長児↑
- 「天国」に占める割合が多い(Human: 27/37, 73%, Animal: 30/38, 79%)
年長児(5~6歳)頃に「天国」という表現を使用するようになる
- 生と死が未分化なもの：年少児↑, 年長児↓
年齢とともに、適切な回答が可能となる
- 年少児における人間の「未分化」に占める割合が多い
「未分化」には「医療」が多く含まれている(Human: 18/26, 69%, Animal: 11/17, 65%)…人の死と「医療」との関連
- 死を現実的に捉えているもの
人間・動物ともに有意差なし…経験の影響？

まとめ ②

- 人間と動物の死後観について、発達的変化に大きな違いはない
- 人間と動物の死後観について、子どもは弁別していない
- 動物の各学年における「未分化」の占める割合が少ない
ペットなどの死を通した経験により人間の場合よりも適切な回答が可能？
- 問題点 今後の課題
 - 質問項目が1つのみ
 - 経験などの関連要因
 - ✓ ペットの飼育 ペットとの死別・埋葬
 - ✓ 死別経験 葬儀、墓参りなどその他一連の儀式などへの参列
 - ✓ 保護者との関わり

ご静聴ありがとうございました

資料 ①

Table 3 学年 × カテゴリー（人間）

	来世に関するもの (n = 37)	現実に捉えているもの (n = 28)	生と死が未分化なもの (n = 26)
年少児 (n = 25)	3 (12%) (8%)	7 (28%) (25%)	15 (60%) (58%)
年中児 (n = 30)	10 (33%) (27%)	13 (43%) (46%)	7 (23%) (27%)
年長児 (n = 36)	24 (67%) (65%)	8 (22%) (29%)	4 (11%) (15%)

N = 91 (注)セル内数字は人数、セル内()上段:学年%, 下段:カテゴリー%

$$\chi^2(4)=26.66, p <.01$$

残差分析

年少・来世(残差: -3.4, $p <.01$), 年少・未分化(残差: 4.1, $p <.01$)

年長・来世(残差: 4.1, $p <.01$), 年長・未分化(残差: -3.0, $p <.01$)

CramerのV: .38, $p <.01$

資料 ②

Table 4 学年 × カテゴリー（動物）

	来世に関するもの (n = 38)	現実に捉えているもの (n = 35)	生と死が未分化なもの (n = 17)
年少児 (n = 28)	5 (18%) (13%)	12 (43%) (34%)	11 (39%) (65%)
年中児 (n = 30)	14 (47%) (37%)	11 (37%) (31%)	5 (17%) (29%)
年長児 (n = 32)	19 (59%) (50%)	12 (38%) (34%)	1 (3%) (6%)

N = 90 注) セル内数字は人数, セル内 () 上段 : 学年%, 下段 : カテゴリー%

$$\chi^2(4)=16.93, p <.01$$

残差分析

年少・来世(残差: -3.1, $p <.01$), 年少・未分化(残差: 3.3, $p <.01$)

年長・来世(残差: 2.4, $p <.05$), 年長・未分化(残差: -2.8, $p <.01$)

CramerのV: .31, $p <.01$